

保健婦の母子保健指導にかかわる教育の あり方に関する研究

大野絢子¹⁾、宮地文子²⁾、村山正子³⁾、佐々木美佐子⁴⁾
長浦美晴⁵⁾、錦織正子⁶⁾、丸山美知子⁷⁾

要約：高齢化社会の基盤を担うべき母子保健の意義は大きく、特に現代のような少子化時代においては重要な課題である。そこで、保健婦教育における「母子保健指導」に関する教育の現状を把握するために、教育者、卒業生、現場の指導者を対象に調査を行った。その結果、①現在の保健婦の母子保健指導教育の力点②在学中の学習内容と卒業教育への期待③現場が期待する学習レベルと課題等が明らかになった。これらの結果を踏まえ、今後の「母子保健指導」に関する教育の課題と方向を検討した。

見出し語：母子保健指導、保健婦教育、卒業教育

I 研究目的

保健婦教育における「母子保健指導」に関する教育の現状を教育者、卒業生、現場の指導者より調査し、今後の保健婦教育における「母子保健指導」等の位置づけを明らかにするとともに、教育の方向を提言することを目的とする。なお本研究は二年継続とし、一年次は実態調査実施と集計、二年次に調査協力者と研究班員の意見交換による調査結果の検証を実施、なお関係方面からの意見を聴取し、今後の母子保健指

導教育の方向を提言する。

II 研究方法

1. 調査方法：郵送によるアンケート調査

2. 調査対象：

- 1) 教務主任（保健婦基礎教育）58名
- 2) 保健婦教育課程（関東8校）を卒業、保健所・市町村に就職後1～3年目の保健婦539名
- 3) 保健所及び市町村の保健婦業務担当主務者
812名

3. 調査期間：平成5年11月

¹⁾群馬大学医療技術短期大学部

²⁾埼玉県立衛生短期大学

³⁾東京都立医療技術短期大学

⁴⁾新潟県公衆衛生看護学校

⁵⁾長野県公衆衛生専門学校

⁶⁾群馬県立福祉大学校

⁷⁾国立公衆衛生院公衆衛生行政学部研究生

4. 調査内容

1) 教務主任への調査

- (1) 「母子保健指導」に関する教育の実態
- (2) 教育の重点と教育上の工夫

2) 卒業生への調査

- (1) 学生として学んでよかったと思う教育内容
- (2) 学んでおくべきと思う課題

3) 保健婦業務担当主務者への調査

- (1) 在学中に学ぶべき内容と卒後教育

Ⅲ 研究結果

1. 教務主任に対する調査結果

調査対象58名、回収50名、回収率86.2%であった。

1) 母子保健指導の教育実態

保健婦課程の種類では、50校中保健婦単科25校(50%)、保健婦・養護教諭19校(38%)、保健婦・助産婦6校(12%)であった。

2) 「母子保健指導」の教育内容

(1) 指定規則、学生用テキストから小項目57項目を選定して各校の回答を得た。ほとんどの項目は授業として取り上げられていた。又、特に力を入れているものとして、乳幼児の成長発達の特徴44%、乳幼児の発育発達の評価42%、保健婦の役割34%、母子保健の理念・意義・目的30%であった。

(2) 関連科目についてみると、カゴリーE^{*)}の母子に関する活動方法は60%以上関連科目で取り上げている。これは保健婦活動の方法論の分野で他の教科で中心におこなわれている部分であるためと思われる。

(3) 卒業後の継続教育の必要性について回答の多い順にみると、①自助グループの育成、②地区組織の育成と共同活動、③思春期問題、④被虐待児、⑤遺伝相談、多問題家庭、乳幼児期発育発達の評価などである。

3) 母子保健指導教育に対する自由記載

(1) 母子保健指導の教育として、特に工夫していることは、具体的場面の設定によるわかりやすい授業や訪問実習体験などが多く、次いで教育方針の検討やカリキュラム編成などであった。母子保健教育の重要性を強調しているものが多かった。

(2) 母子保健指導の教育のために開発が必要な教材について最も多いものは、成長発達のプロセスの学習、家庭訪問、自助グループの育成、保健婦の関わり方などのビデオ教材、人形 dolls 等演習用教材等であった。

(3) 少子化時代の母子保健教育のあり方の意見では、少子化時代は学生自身の成長過程で子どもに触れる機会が少なく、子どもの扱い方、遊ばせ方など、従来なら家庭の中で経験していることが体験されていないので教育の中で意図的に取り組む必要があるというものが多かった。

2. 卒業生に対する調査結果

調査対象者539名中、回答者242名、回答率44.9%であった。

1) 卒業生の実態

(1) 242名の勤務場所は市町村が173名(71.5%)、県立保健所46名(19.0)、特別区保健所22名(9.1)であり、卒業後の年数は各年度ほぼ同数

*) カゴリー-A: 母子保健体系、カゴリー-B: 母子保健に関する保健・医療・福祉のしくみ、カゴリー-C: 母子保健指導の方法、カゴリー-D: 母子保健指導の知識・技術、カゴリー-E: 母子に関する活動方法

であった。

(2)出身の保健婦教育課程の種類は、保健婦単科110名(45.5%)が最も多い。

(3)主な担当業務は、母子保健138名(57.5%)、次いで成人保健81名(34.7%)、老人保健61名(25.7%)であり、母子保健を担当する者が半数以上を占めている。市町村勤務が71.5%で、母子保健担当が多い。

2)基礎教育で学んだ母子保健指導の教育内容の学習状況

(1)母子保健指導の教育内容57項目のうち70%の学生が学べたとしている項目は34項目(59.6%)であった。学べたとする率の高いのは、カテゴリAの母子保健体系に関するもの(母子保健活動の理念・意義・目的、保健婦の役割等)で、全ての項目が90%以上だった。しかし、カテゴリCの保健指導の方法に関するものでは、学べたとする人が70%以上の項目は一般妊産婦保健指導と一般乳幼児保健指導の2項目のみであった。

学べた項目のなかでも特に良く学べたという上位の項目は、訪問指導の意義・方法(42.9%)、一般乳幼児保健指導(42.1%)、乳幼児期各期の成長発達の特徴(38.1%)、乳幼児健康診査(34.6%)、健康相談の意義・方法(29%)、一般妊産婦保健指導(26.7%)であった。一方在学中学べなかったと回答している者が50%以上こえているものとして、被虐待児保健指導(70.7%)、慢性疾患児保健指導(57.9%)、多問題家庭保健指導(56.6%)、思春期保健指導(55.0%)、妊娠中毒症等療養援護(52.9%)、更年期婦人保健指導(50.8%)、自助グループの育成(50.8%)であった。卒業後年数による差はみられていない。

3)自由記載の結果

(1)保健婦学校の1年間の教育で母子保健について学んでよかったと思う課題(講義)や実習について52%の人が乳児の家庭訪問実習を上げ、その中でも特に新生児から発育発達の経過をおった継続訪問実習をあげている人が多かった。次いで乳幼児健診の実習、乳幼児健康相談の実習、各種健康教育の実習、乳幼児の発育発達の評価と成長発達の特徴の学習であった。卒業後年数による差はなかった。

(2)卒業して母子保健活動を遂行する上で、保健婦教育で不十分だったと思う内容を3項目あげてもらった。第1位は乳幼児の発育発達の評価・成長発達の特徴(30.2%)、2位は母子保健関連の制度に関するもの(19.8%)、3位は乳幼児の栄養(14.9%)であった。

(3)卒業後受けた研修と今後受けた研修

卒業後、母子保健に関する研修を受けた人は76.5%と高かった。卒後1年目65.4%、2年目85.2%、3年目93.7%で経験年数の多いほど研修を受けた人の率は高かった。今後受けた研修は、乳幼児の発達の評価と遅滞児の指導、思春期保健指導、育児相談技術など実践活動にすぐ役立つ研修を希望していた。

3.保健婦業務担当主務者に対する調査結果

調査対象者812名中、回答者453名、回答率55.8%であった。

1)回答者の状況

勤務場所は、453名中、市町村が325名(71.7%)で最も多かった。

2)基礎教育で必要な母子保健指導の教育内容

表1は現場の指導者の教育内容57項目の回答

結果である。絶対に必要と回答しているものが50%をこえる項目がカテゴリーAの5項目中4項目で、特に60%以上が多い。カテゴリーBは50%をこえていない。ついで必要では57項目全て50%をこえている。カテゴリーCでは11項目中4項目が絶対必要50%代である。カテゴリーDでは18項目中4項目が50%以上絶対に必要と回答しているが回答にバラツキが目立つ。カテゴリーEでは8項目中4項目が50%をこえて絶対に必要と回答している。

3) 自由記載の結果

(1) 卒業後1～3年に母子に関するどのような研修が必要かを自由記載の欄でみると、母子保健指導の知識・技術に関するもの(58.1%)、母子に関する活動方法に関するもの(27.6)が最も多かった。具体的な指導方法に関する研修を要望していた。

(2) 保健婦教育の中で母子保健に関する教育(講義、実習等)について日頃考えていることの中には、「実習を増やし体験学習を強化してほしい」、「乳幼児の成長発達をみて判断できる能力の開発」、「卒後の母子関係の研修体系の確立」や母子保健は保健婦活動の拠点であるなど母子保健指導教育への期待が多い。自由意見は紙面全体に現場の課題と教育への期待が記入されており、現場の人々の声を直接きく機会となった。

4) 調査の比較

(1) 母子保健指導における教育内容57項目に対する調査対象者別比較(以下3者という)

表1,2は母子保健指導の教育内容57項目について必要と回答しているものを比較したものである。必要性の高い10位をみると、3者ともに必

要性の高いと回答している項目は、①乳幼児期各期の成長発達の特徴、②訪問指導の意義・方法、③保健婦の役割、④乳幼児期発育発達の評価、⑤一般乳幼児保健指導などである。

一方、上記の回答が3者とも低いものは、①補装具給付、②妊娠中毒症等療養援護、などカテゴリーBの母子保健に関する保健・医療・福祉のしくみに関するものであった。

(2) 母子保健指導における教育内容57項目に対する調査対象者別比較(カテゴリー別)

教育内容のカテゴリー別にみると、カテゴリーAの母子保健体系は全体に高率であり、中でも「保健婦の役割」や「母子保健の理念・意義・目的」は特に高いといえる。カテゴリーBの母子保健に関する保健・医療・福祉のしくみは全体に低率であり、「妊娠中毒症等療養援護」や「補装具給付」は3者とも特に低い。また、「遺伝相談」は教育者は特に力を入れている項目であるが、現場の指導者は57項目中53位と必要ではないと回答している。カテゴリーCの母子保健指導の方法では教育者が特に力を入れている項目が多い。しかし、卒業生は慢性疾患児や多問題家庭など回答の低い項目が多い。D母子保健指導の知識・技術では、乳幼児期各期の成長発達の特徴や乳幼児の発育発達の評価など乳幼児に関する項目が3者とも高率である。カテゴリーEの母子に関する活動法では、訪問指導や健康相談の意義・方法などが3者とも高率であった。

IV 考察

1. 保健婦教育における母子保健指導教育の教育内容として重要な項目の提示

保健婦教育の内容を指定規則、保健婦学生用

の残から小項目(1)の教育内容を57項目選定して、教育者、卒業生、現場の指導者に対しそれぞれの項目ごとに、「取り上げている、いない」「学べた、学べない」「必要、必要でない」についての意見をもとめた。3者がそれぞれ「取り上げている」「学べた」「必要」(以下「必要性あり」とする)と回答したものは、A-5保健婦の役割、C-24一般乳幼児、D-35乳幼児期各期の成長発達の特徴、D-36乳幼児期発育発達の評価、E-50訪問指導の意義・方法、であった。この結果はそれぞれの自由回答においても同様であった。カテゴリ-Aの母子保健体系については3者とも「必要性あり」をあげており、特に保健婦の役割については現場の指導者からの意見が大きい。母子保健は、生命に対する尊厳など、看護職員としての資質や職業観を育てる分野であり、これからの教育として重要な分野であることがわかる。

カテゴリ-Cの一般乳幼児の「必要性あり」は高く、又、自由意見でも、特に学生の育児体験が乏しく、実習の強化をもとめていたところである。カテゴリ-Dで「必要性あり」をあげているものとして、乳幼児期各期の成長発達の特徴、乳幼児期発育発達の評価であった。家庭の中での育児体験の少ない少子化時代の特徴として考えてよいと思われる。核家族化の進む中、学生自身の成長過程で母子に接する機会が少なく、また学生時代も実習等で乳幼児に接することが少なくなってきたことも原因の一つではないかと思われる。カテゴリ-Eの訪問指導の意義・方法も「必要性あり」について高い割合となっている。これらの回答状況から現状の教育と現場において

「必要性あり」の高い教育内容は、ほぼ一致していることがわかる。又、このことは自由意見でも同様なものが多く、教育内容で強化すべき点については調査結果から明らかにすることができた。この結果を、今後二年次において調査協力者と具体的に協議を深め、教育内容、方法について試案の作成をすることが課題である。

2. 保健婦基礎教育において強化すべき内容と卒後教育において継続すべき内容を明確にすることによる卒後教育プログラムの作成

保健婦の業務は、現場で業務を進めながら学んでいくことが多い。基礎教育においては1)で述べたように、A-5、C-24、D-35、D-36、E-50、などの基礎的な項目を十分学習させたい、したい、してほしい、と3者とも要望が強い。各種母子保健に関連する制度や特殊事例への保健指導の方法は卒後教育に継続されるべき内容とする意見で、特に現場の指導者はこれを踏まえた卒後の研修体系を確立してほしいとの意見が多い。保健婦教育において強化すべき内容と卒後教育ですべき内容を調査結果をもとに、さらに意見交換で内容を検討し、卒後研修プログラムの試案を作成する必要がある。

3. 実習内容について事例体験をもちこんだ方法の導入を強化

57項目の教育内容の調査結果や教務主任、卒業生、現場の指導者の意見にみるように、3者ともに乳幼児との接点の少なくなった学生に対し、継続した事例とのかわりを強化すべきというものが多い。

実習については、教育課程の種類別にみても総時間、母子実習等、明かな差がみられ、教育内

容や実習内容に特性があることがわかった。こうした現状をふまえ、さらに看護教育の大学化が進む中で、現場では様々な教育背景をもった卒業生を受け入れていかななくてはならないという課題がある。従って、これを機会に保健婦教育自体についても検討していくべきではないかと思われる。

高齢化社会における各種対策が先行し、保健婦の仕事も母子から老人へとその対象が移行されてきている。このことが教育内容にとって、どう影響をうけたのかは今回の調査では明らかにされていない。二年次における研究の継続により具体的な事実を聴取し、より問題点を明確にしていきたい。その上で、実習についての基本的な考え方の試案を提示する必要がある。

V おわりに

調査結果から、保健婦教育における母子保健指導教育の現状の概要を把握することができた。特に57項目に選定した教育内容については、教育者、卒業生、現場の指導者の意見から共通部分、相違部分が明らかになった。又、自由意見では紙面いっぱい意見を書き入れている教育者、卒業生、現場の人々の声が、今それぞれの立場の悩みの強さを感じさせるものであった。二年次において、この調査結果をさらに具体的に協議を深め、保健婦学生の在学中の教育が現場の指導者のもとで効果的に発展し、それが保健指導の質の向上に連がるものとなるよう提示していかななくてはならないと考えている。

調査にご協力いただきました方々に深く感謝申し上げますとともに、引き続きご協力をお願いいたします。

参考文献

- 1) 平山朝子編：母子保健指導論、公衆衛生看護学体系、日本看護協会出版会、1991
- 2) 荻野博・三品照子編：母子保健指導論、新版保健学講座、メジカルソフト社、1991
- 3) 福渡靖編：地域における母子保健活動のすすめ方、保健同人社、1986
- 4) 厚生省健康政策局看護課編：看護教育カリキュラム - 21世紀に期待される看護職者のために -、第一法規、1989
- 5) 我妻堯・前原澄子編：地域母子保健・助産業務管理、助産学講座、医学書院、1991
- 6) 国文義行他：母子保健学、診断と治療社、1990
- 7) 高野陽編：母子保健マニュアル、南山堂、1992
- 8) 松本清一：新時代の母子保健指導と妊産婦の健康教育、ライフサイエンスセンター、1986
- 9) 竹村喬：目でみる母性保健指導の実際、医学書院、1988
- 10) 宮尾益英編：最新育児小児病学、南江堂、1992
- 11) 前田如矢他：育児と小児保健、金芳堂、1992
- 12) 松本清一編：妊産婦のケア、文光堂、1989
- 13) 高野陽編：乳幼児保健指導の実際、医学書院、1990

表1 母子保健指導の教育内容の必要性 (調査対象者別比較)

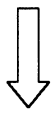
No	カテゴリー	項目	教務主任			卒業生		現場の指導者	
			特に力を入れている N=50	取り上げている N=50	よく卒べた N=240	卒べた N=240	絶対に必要 N=453	必要 N=453	
1	A 母子保健	母子保健の理念・意義・目的	30.0	66.0	20.8	65.8	32.9		
2		母子保健の歴史	6.0	70.0	15.4	41.9	55.8		
3		母子保健行政と保健事業	10.0	80.0	14.7	58.1	38.6		
4		母子保健統計	8.0	82.0	22.9	62.3	35.3		
5		保健婦の役割	34.0	66.0	22.9	75.5	23.2		
6	B 母子保健に関する保健・医療・福祉	母子保健手帳	18.0	72.0	24.3	33.1	60.7		
7		妊産婦健康診査	6.0	82.0	12.1	27.4	62.9		
8		B型肝炎母子感染防止事業	4.0	74.0	6.5	27.2	62.7		
9		マタニティ健康診査	4.0	82.0	13.8	26.7	63.6		
10		乳幼児健康診査	22.0	70.0	34.6	43.5	51.2		
11		妊産婦健康診査	0.0	72.0	3.3	15.5	69.8		
12		未熟児等医療	2.0	74.0	3.8	15.5	67.3		
13		遺伝相談	18.0	54.0	0.4	22.1	67.9		
14		育成医療	0.0	70.0	8.8	18.3	70.6		
15		療育給付	0.0	66.0	8.8	17.0	67.5		
16	小児慢性特定疾患治療研究事業	0.0	74.0	7.9	18.1	67.8			
17	補装具給付	0.0	58.0	2.9	12.4	65.8			
18	療育相談所	2.0	62.0	1.7	19.0	64.7			
19	児童相談所	0.0	56.0	4.2	26.9	66.0			
20	福祉事務所	0.0	58.0	2.5	26.3	65.3			
21	C 母子保健指導の方法	一般妊産婦	18.0	64.0	26.7	54.1	40.6		
22		ハイリスク妊産婦	14.0	66.0	9.2	51.2	45.3		
23		若年・高齢の母親	4.0	72.0	1.1	43.9	51.4		
24		一般乳幼児	18.0	62.0	3.8	57.4	38.0		
25		未熟児など問題のある児	1.6	60.0	3.8	51.4	44.8		
26		心身障害児	2.0	66.0	1.3	42.4	52.1		
27		慢性疾患児	8.0	44.0	3.9	35.3	57.8		
28		療育待機問題	18.0	58.0	4.2	29.4	57.8		
29		児童養育施設	2.0	42.0	0.8	35.1	56.5		
30		多国籍人	6.0	42.0	1.3	28.3	58.1		
31		多国籍人	6.0	68.0	4.4	28.3	62.3		
32	D 母子保健指導の知識・技術	妊産婦・産婦期の生活指導	12.0	58.0	16.3	50.6	41.9		
33		妊産婦体性	4.0	38.0	6.6	28.3	59.4		
34		家庭計画と受胎調整	12.0	62.0	6.4	35.8	55.2		
35		乳幼児の成長発達の特徴	44.0	46.0	6.6	67.5	28.0		
36		乳幼児の発達促進の実践	42.0	46.0	2.1	66.2	29.8		
37		乳幼児の発達促進と実践	12.0	60.0	2.0	66.2	46.1		
38		混合栄養と人工栄養	6.0	64.0	2.0	47.1	57.8		
39		母乳の量・質・準備・進め方	20.0	56.0	1.9	33.1	46.1		
40		乳児の生活習慣	10.0	70.0	2.2	43.9	50.8		
41		赤ちゃんと玩具	14.0	66.0	1.6	50.1	42.4		
42		赤ちゃんと遊び	12.0	42.0	3.8	24.3	58.3		
43		乳児の生活習慣	6.0	64.0	6.6	23.2	61.4		
44		乳児の生活習慣	6.0	60.0	7.9	20.3	61.8		
45	乳児の生活習慣	8.0	70.0	3.3	32.8	55.9			
46	乳児の生活習慣	0.0	58.0	0.7	35.3	53.9			
47	乳児の生活習慣	6.0	72.0	3.3	35.3	53.9			
48	乳児の生活習慣	8.0	72.0	4.4	38.0	54.3			
49	乳児の生活習慣	4.0	54.0	9.1	49.9	43.0			
50	E 母子保健に関する	訪問指導の意義・方法	18.0	44.0	42.5	69.1	26.7		
51		電話相談の意義・方法	14.0	54.0	7.8	64.0	31.7		
52		健康相談の意義・方法	16.0	44.0	8.8	63.8	30.7		
53		健康相談の意義・方法	10.0	48.0	3.3	54.5	38.2		
54		健康相談の意義・方法	10.0	62.0	6.6	47.5	41.5		
55		健康相談の意義・方法	6.0	58.0	0.8	43.0	42.8		
56		健康相談の意義・方法	18.0	44.0	4.4	46.1	40.4		
57	健康相談の意義・方法	14.0	56.0	9.6	46.8	42.8			

表2 必要性の高い教育内容の調査対象別比較

教務主任	卒業生	現場の指導者
1 乳幼児期各期の成長発達の特徴	1 訪問指導の意義・方法	1 母子保健活動における保健婦の役割
2 乳幼児期各期の成長発達の特徴	2 一般乳幼児の保健指導	2 訪問指導の意義・方法
3 母子保健活動における保健婦の役割	3 乳幼児期各期の成長発達の特徴	3 訪問指導の意義・方法
4 母子保健の理念・意義・目的	4 乳幼児健康診査	4 訪問指導の意義・方法
5 一般乳幼児の保健指導	5 健康相談の意義・方法	5 訪問指導の意義・方法
6 乳幼児健康診査	6 一般妊産婦の保健指導	6 訪問指導の意義・方法
7 母乳の基本・準備・進め方	7 乳幼児期各期の成長発達の特徴	7 訪問指導の意義・方法
8 母子健康手帳	8 健康相談の意義・方法	8 訪問指導の意義・方法
8 遺伝相談	8 一般妊産婦の保健指導	8 訪問指導の意義・方法
8 一般妊産婦の保健指導	8 未熟児など問題のある児	8 訪問指導の意義・方法
8 未熟児など問題のある児	8 恩恵期間問題	8 訪問指導の意義・方法
8 恩恵期間問題	8 訪問指導の意義・方法	8 訪問指導の意義・方法
8 訪問指導の意義・方法	8 地区組織の育成と共同活動	8 訪問指導の意義・方法
8 地区組織の育成と共同活動	8 遺伝相談	8 訪問指導の意義・方法
8 遺伝相談		



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用
論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



要約:高齢化社会の基盤を担うべき母子保健の意義は大きく、特に現代のような少子化時代においては重要な課題である。そこで、保健婦教育における「母子保健指導」に関する教育の現状を把握するために、教育者、卒業生、現場の指導者を対象に調査を行った。その結果、現在の保健婦の母子保健指導教育の力点 在学中の学習内容と卒後教育への期待 現場が期待する学習レベルと課題等が明らかになった。これらの結果を踏まえ、今後の「母子保健指導」に関する教育の課題と方向を検討した。